「鼠の嫁入」と兒童の心

小池藤五郎

枝もたわわに實つてゐる柿の梢を夕陽が紅に染めてゐたが、暮るゝに易い山國の秋の陽は、いつの間にか駒ヶ嶽の肩をすべり落ちてしまつた。駒ヶ嶽・茅ヶ嶽・八ヶ嶽の圍んでゐる大溪谷には、暮色が漸く色濃くなつて來て、藁屋の櫓煙出しから吐き出す夕餉の煙は、其のまゝしつこりと谷底に澱み、溪のせゝらぎをもかすかならしめてゐる。

溪谷の人家には、間もなく酸漿の實程な灯がこもり、家の中には榾火に顏を赤くさせて、爐のまはりに一家の者は作男までもならんでゐる。嫁や娘に家事をすつかりまかせた樂隱居の老婆が、爐べりの上座に坐つて、昔話の口を切り初めるのは、樂しい夕餉が終つて手製の澁茶を飲む頃からであつた。

「明日は降るかなァ」

と誰やらが言ふ樣なごんよりと曇つた夜に、茅ヶ嶽の裾野へ續く臺地へ登るつゞらをりの山道を、提燈の樣な灯がいくつも竝んで盛んに登つたり下つたりしてゐるのを私は屢〻見た。老婆はそれを幼い私に「狐の嫁入」であると說明してくれた。それから「鼠の嫁入」・「狐の嫁入」なごの話を幾度も老婆から聞いた。

大黑樣の召使で、正月には「嫁が君」と祝はれる鼠は、昔から日本人と深い關係を持つ動物であつて、

嫁が君餅をぞ今日は初かぶり　　貞德

などとも吟じられてゐる。

「小學國語讀本、卷二」には「ネズミ　ノ　ヨメイリ」と言ふ一課がある。「鼠の嫁入」がこゝまで來るには、多くの變遷を經てゐるらしい。

「古事記」を見ると、大穴牟遲神（大國主神）が、御父上の須佐之男命を、根堅洲國に尋ねてお出でになつた時、父君が無理な命令を色々となされる事が記してある。

亦、鳴鏑を大野の中に射入れて、其の矢を採らしめ給ふ。故、其の野に入ります時に、卽ち火以て其の野を燒き廻らしつ。於是、出でむ所を知らざる間に、鼠來て云ひけるは、「內は洞々、外は窄々」。斯くいふ故に、其處を踏みしかば、落ち入り隱りし間に、火は燒け過ぎぬ。玆に、其の鼠かの鳴鏑を咋ひ持ち出で來り奉りき。其の矢の羽は、其の鼠の子等、皆喫ひたりき」（古事記、上卷）。

大國主命の說話の中に、斯うした鼠の話が插入されてゐる事と、梵語の摩訶迦羅（Mahākāla）の意味の大黑樣とが結合して、後世になつて大黑天を大國主命とする俗說が出來上つたものであらう。我國で大黑天を祭る始は、傳敎大師であつたらしい。それはこの神を祭る時は福德を得ると云ふ信仰が印度にあり、西天竺の諸寺では、この佛を祭つてゐたのを傳敎大師が眞似られたものかと考へられる。

「源平盛衰記」には、平淸盛がまだ左衞門佐であつた折に、內裏の南殿に於て、化鳥を捕へた事が記されてある。その後に、

鼠は大黑天神の仕者なり。此の人（淸盛のこと）榮華の先表たり。威勢は大威德天、福分は辨才妙音陀天の御利生なり」。（卷一、淸盛化鳥を捕る、竝、一族官位昇進、附、禿童、竝、王莽の事）

の記事が見える。

米は昔の日本人の第一の食料であり、寶であつた。この米を施福神である大黑天の所領となし、大黑天を米俵の上に立たせる事は、米を尊ぶ意味から極めて妥當な考へである。一方、鼠は米穀を害し食む動物であるから、昔の人は米を司る施福神の大黑天に、米の害物をも併せて司らしめたであらう。この樣な事は、他の佛と其の「つかはしめ」の間にも見られる處である。更に大黑天の神位が北方であるから、子卽ち鼠の位に相當する意味も加はつてゐるかも知れない。とにかく、米の害物の鼠を福神大黑天のつかはしめとするが、特に白鼠は一段と重んぜられる。「太平廣記」には「白鼠」を「金玉の精」となし、「本朝食鑑」や「廣益俗說辨」・「百姓袋」・「柳亭記」など、いづれも白鼠を福神とする。

日本文學中に鼠を取扱つた物は多い。その中で「お伽草子」と言つて、大體に室町時代に書かれた小說の中には、かくれざと」・「猫の草子」・「鼠の草子」・「やひやうゑねずみ」・「藥師通夜物語」などがある。右の中で「かくれざと」の筋を左に記して見よう。

〔梗概〕或晩の事、木幡の野邊で、或人が不思議な穴の中に這入つて行くと、眼を驚かす計りの御殿が建てつらねてある。これは鼠の隱れ里である。この隱れ里に、突然にも一事件が起つた。攝津國の西の宮に住む鼠が、惠比須のおそなへを盜んだ爲に、惠比須の臣下の狛犬と鼠との衝突となり、鼠は散々の眼にあはされた。鼠たちが復讐の計畫をしてゐた時、惠比須は御兄の月讀の宮を茶の湯に招待される爲に、寶物の茶道具を取出して、其の準備をなさつてゐた。鼠たちはこれを良い事にして、その茶道具類に御不淨をしかけたり、道具類を壞したり、散々に振舞つた。惠比須は怒り、大黑と戰を交へる。すると、支那から布袋和尙が渡つて來て、福神同志の爭は、貧乏神の乘ずる處であるからとて、雙方を和睦させる。これも實は夢であつた。

「猫の草紙」は、京都で、猫を柱などに結へ附けて置くべからずと言ふ御觸書が奉行所から下つた時、或高德の僧の夢に

猫と鼠とが現れて、それ〴〵に自分の立場に就いて述べる筋である。又「藥師通夜物語」は、大黑天が鼠たちの爲に、藥師に訴へる筋である。

この樣なお伽草子の中で、私が特に見たいと願つてゐるのは、「鼠の草子」と云ふ珍らしい書物である。平出鏗二郎氏の「近古小說解題」にも、この書物は繪卷物であつて、且つ、斷簡である事、中には京都の大佛三十三間堂などの文句がある事等を記し、更にこの作品の成立は慶長頃であらうと推定してゐる。

鎌倉室町時代から德川時代の初期にかけて、鼠に關するお伽草子、或は繪卷物の類は多く世に現れ、鼠は特に時代の人人の人氣を博してゐたらしい。それ等には「隱れ里」の思想が、特に色濃く現れて來てゐる。「隱れ里」とは、隱れ住む場所の意味であるが、童話的の見方が、何時しかそれを仙境としてしまつたものである。滿ち足りた生活をなし得る世界、金銀物資に不足のない場所が「隱れ里」である。從つて鹿にも鶴にも雀にも「隱れ里」がある筈であり、事實その通りであるが、人の考へ方は鼠の福德を過大視して、何時しか「隱れ里」と言へば「鼠の住む里」の如くに考へる樣になり、それは謠曲の「隱れ里」に見るやうな狀態である。鼠と福神との關係が、物質的であつたその時代の人をして斯くあらしめたものであらう。

「隱れ里」の思想は更に展開して、其處に住む鼠を一入と人間の生活に近づかせる樣に動いて行つた。お伽草子の「かくれざと」に見るが如くに、それは祝儀物であり、異類物である。卽ち人生の理想を鼠によつて表現してゐるものである。人生に於て最も祝ふべく喜ぶべき事は、結婚より出產に至る子孫繁榮の過程であつて、この點が一段と高潮せられ、恐らくは、室町時代に於て完成し、それが口碑や繪卷として世に弘まつたであらう。「藥師通夜物語」中の寬永二十年頃の記事と推定される物には、

「いにしへ鼠のよめ入とて、果報の物と世にいはれ……」

とある。寛永二十年頃に、既に「いにしへ」と言はれてゐる點から、「鼠の嫁入」の成立と流行の始を察する事が出來る。時の流行には變遷があつたにせよ、寛永より元祿に近づくにつれて、「鼠の嫁入」は一段と世に弘まつたらしい。「鼠の嫁入」が書いてある小册子や一枚繪は、正月に子供等の玩び物として缺くべからざる物となり、俳諧では「嫁が君」は正月の物となつた。要するに從來のお伽草子的の部分から漸く脫却して、獨得の展開をなしつゝあつたのである。

子供の遊びとしての「人形遊」や「まゝ事遊」と共に、「鼠の嫁入」は兒童の生活準備、本能の側面と緊密に聯絡する樣になり、教育的の立場から淨化され指導され、準教材的の職能を深めて來た。私が「鼠の嫁入物」と呼んでゐる文獻中で、其の刊行の古い物だけを左に列擧する。

○行成表紙本

鼠年中行事(一册、延寶九年刊)。

たからねずみ(一册、天和二年卯春吉辰、大傳馬町三丁目鱗形屋刊)。

かくれさとのゆふらん花よりだんごをひくねずみ鼠の嫁入(一册、刊年未詳)。

○赤　本

鼠花見(一册、近藤清春畫、さかい丁中島屋刊)。

鼠のえんぐみ(一册、西村孫三郎重信畫、伊勢屋刊)。

ねずみ文七(一册、西村屋刊、刊年未詳)。

鼠よめ入(柱題)(二册、刊年未詳)。

ねずみ(柱題)(一册、刊年未詳)。

鼠の道中(柱題)(二冊、刊年未詳)

○黒本。青本。

いせ道中(一冊、長谷川町、㊤刊、刊年未詳)。

鼠の嫁入(二冊、黒本、鳥居清満畫、刊年未詳、この書は私が新しく發見した物である)。

鼠嫁入蝙床(うづらのとこ)(二冊、黒本、青本、安永元年鶴屋刊)。

鼠嫁入雛形(二冊、黒本・青本、富川吟雪畫、刊年未詳)。

○黄表紙

鼠嫁入(安永七年刊)。

鼠子婚禮塵劫記(三冊、曲亭馬琴作、寛政五年刊)。

鼠嫁入(二冊、内新好作、樹下石上畫、享和三年刊)。

○墨摺一枚繪

鼠の嫁入(縦八寸七分、横一尺一寸六分六厘)。

○半紙本

鼠嫁入(櫻川慈悲成作、寛政頃刊か、淨瑠璃模擬本。私が新に發見したものである)。

上記の各文獻は、いづれも珍らしい物であつて、容易に手に入れる事は出來ない。中には天下に僅に一冊しかない物もあり、或は書名のみで實物は全く滅亡してゐる物もある。

墨摺一枚繪の「鼠の嫁入」は近藤清春なぎの作かと思はれる極めて珍らしい物であつて、素朴・古拙・洵に愛すべき文獻で

ある。其の内容は左の如くである。

〔内容〕右方から左方へ向つて花嫁の行列が進んでゐる樣が畫かれてある。左方の上に隅には花聟の鼠が坐り、嫁の來るのを待つてゐる。左方には提燈を先にして、嫁の乘物が進んで來てゐ、駕籠の後には、乳母ニ宰領の七藏が附添つて來てゐる。下方には餅をついたり、料理をしたりする樣が畫かれてゐる。

一枚の繪であるが、各々の場面が畫かれてゐ、繪の間に文章が僅に書き入れてあり、說話ニしての「鼠の嫁入」を、繪の表象的の意味によつて表現したまでゝ、この話の忠實な記錄ニ言ふ事は出來ない。さりながら、年代の古い事ニ、一枚繪てふ特色によつて刮目すべき物である。

「鼠の嫁入物」の中で、最も代表的の文獻は、赤本の「鼠よめ入」である。これも亦珍らしい物であるから、稍ゝ詳しく述べて見よう。

〔梗概〕(1)(2)等の數字は、原本の畫面の順序を指すものである〕。

(1)鼠の家では、家の中の掃除をする者、門の外を掃く者、打水をする者などゝ、嫁を迎へる準備で忙しい。これ等の者共は、仕事をしながらお互に話をしてゐる。

(2)結納を持ち込んだ處で、桝(ますわな)畏いや介ニ言ふ鼠が婿の方の使者である。銀を臺に載せ、鴨の番、熨斗、眞綿などをもそれ〴〵に臺に載せて竝べてあり。諸白(もろはく)(淸酒)が二樽添へてある。

(3)結納を持つて來た者に、座敷で酒を出してゐる。勝手では吸物を作り、又、酸の物をも作らうとしてゐる。供部屋ではお供の者が酒の馳走になり、引出物を貰つてゐる。

(4)御齒黑(おはぐろ)をつける女、髮を結ふ女、額を剃り附けてもらふ女、着物を縫つてゐる女、布を裁つ女、衣服を疊む女など

を畫いて、嫁入の支度の忙しさを現はしてゐる。

(5)勝手元では、結婚式の料理を作つてゐる。

(6)嫁の荷物を送り込む圖である。塀が畫面の中央に横に畫かれてあつて、畫面が上下に分れてゐる。塀の向ふ側、即ち畫面の上の方を、右の方から左へ行列が進み、塀の左の端を廻つて、其の先頭は畫面の下の方の左方から更に右方へ向つて進んでゐる。

(7)行列が進んで來て、花嫁の駕籠が塀の前に現れてゐる。

(8)花嫁の駕籠が塀について更に進んでゐる。

(9)塀の前には迎の者が待つてゐる。花嫁方の提燈持が迎の人々に挨拶してゐる。

(10)塀の左端が畫いてある。塀を廻つて行列が來てゐ、迎の者と送つて來た者との間に、花嫁と其の荷物との受渡しを行つてゐる。

(11)結婚式の圖。

(12)出産と産湯の樣。

(13)お宮參りのさま。

以上を讀まれた讀者諸賢は、今日のシネマの行つてゐる事を、既に元祿の昔に於て、畫工の筆と、畫中の人物の詞によつて、紙面の上で行はれてゐた事に氣附かれるであらう。現代の科學の粹を集めたシネマの行き方は、かゝる赤本の畫面と詞の取合せを展開し發達せしめた事に外ならず、更に又、今日の紙芝居の濫觴にかゝる特色のある繪本の存在する事をも認められるであらう。

赤本「鼠よめ入」は、

一、繪畫の言語的性質がかなりに利用されてゐる。

二、女性を讀者として意識し、婦女に對する啓蒙的の意味を多く含ませてある。かの桃太郎の說話が、男の兒を主とするに對照して考ふべきである。

三、作品の狙ひ處は、嫁入のお目出度さ、滿ち足りた生活そのものである。

四、個人的の色彩が乏しい。

の諸點が特に注意せられる。

四歲から七歲位までの子供は、サンタークロースの繪を書く場合も、童顏の老人が袋を背負つた樣のみを畫かない。彼等は雪の積つてゐる屋外の樣、家・子供のベット、さてはクリスマスツリー・ストーブ・玩具などを覺束ない筆で雜然と一畫面中に描くものである。サンタクロースの特徵を持つた一人物を畫くことは、八歲より十二歲位になつた者、或は青年期に入つた者のなす處である。本書の畫を見、又、畫の間に書き込まれた文章に注意する時、「鼠の嫁入物」が如何に當時の兒童の心理に適合してゐたかゞ私には思はれてならない。

結婚の使者を款待する場面に、座敷・勝手・供部屋（ともべや）と分けて、それ〴〵の樣を寫す事から、結婚の支度をする場合には、裁つ者・縫ふ者・計る者・疊む者・鐵漿（かね）を附ける者・髮を結ふ者・顏を剃る者などゝ、七つの場面が一畫面中に混在する。勿論それは結婚の準備てふ意味によつて統一されてはゐるものゝ、かゝる觀念を、この繪が全く文字と同樣の働きをもつて表現してゐる事は、決して見遁してはならない。

かゝる場合に、花嫁を特に意識して畫き、他の人物をもつて其れを說明するが如くに、花嫁を中心として畫く事は、更

に進歩した後年の手法である。本書に於ては、寧ろかゝる進歩した手法を將來產み出すべき母胎として、其處に大きな混沌さがある。重大なる中心人物の花嫁がごれであるか殆ごわからない。否々かゝる場合に、花嫁がごの鼠であるかを明示する必要はない。嫁入の忙しさを、文字よりも具體的な繪によつて兒童に把握させれば、作者も兒童も共に滿足したであらう。出產の場面の如きも、產婦に藥をすゝめる處、藥を盛る醫者、醫者に杯を出す者、嫁の里から產衣を持つて來た女、產湯をつかはせる女、胞衣を仕末する女、藥を煎じる女なご、さりぐの樣が一畫面中に集合してゐる。當時の兒童には讀物が尠く、今日の兒童よりは智的には甚だ低く、漠然たる感じで、淺く廣く話や事件を理解し、其の中心を明確に把握しようごしなかつた事が、かゝる作品によつて一面には曝露されもしてゐる。

本書には啓蒙的の分子が尠くはない。

「口をきかずご膳を眼八ぶんに持つて行かさい」。

「ごなたから据ゑるのだ」。

「足元を見て靜かに」。

は、結婚式に於て膳をはこぶ鼠の娘たちの對話である。當時の少女たちが、まゝ事遊の世界の延長として、かゝる作品に觸れ、この樣な對話に接する時、或は、

「胞衣はこうするものだ。よう見おぼへてござい」。

なごの言葉や、急いで着物を裁つ時の心得として、

「いそぐ時は三べん歌をよんで裁つご言ひやす」。

「それは何ごいふ歌でござんす」。

等を見る時、彼女等は必ずや親や祖母、或は姉にその歌を問ひ、胞衣の處置方法を聞いたであらう。親や祖母の說明を得る樣にして置いて、本書中では說明を略してゐるこの行き方の如きは、今日の發達した幼兒向の各種の書物中にも僅に見られる處であつて、準敎材としての價値を認めざるを得ない。

私は「鼠よめ入」の繪の方面に多く注意して來た。讀者諸賢中には、この書物は繪のみで書き入は極めて尠いものと思はれるかもしれない。勿論後年の作品の如くに書入は多くはなく、繪と文との綜合的の作品であつて、素朴な物の常として地の文章はない。卽ち說話は作中に現れて來る人物の對話と繪の表象的の內容とで進められ、それで充分に理解が出來、別に地の文章で說明する事がしてない。さりながら、作中の人物——鼠——は其の殆ど總てが語り、一畫面中に多數の人物が現れる場合、中には同一人物が二回も三回も語る場合さへある。

作中の人物は、話の相手——聞き手——を意識して語る場合も勿論あるが、多くは、單に獨り言風に語るものである。この點は兒童の實際の狀態と一致するものであらう。三四歲から七歲位までの兒童が遊びながら對話をするのに注意すると、一々其の相手の返事や理解を求めない。個々別々に勝手に語り、勝手に遊んで、全體として或方向に向いてゐさへすれば、それで滿足しきつてゐるものである。本書に斯うした點が現れてゐる事は、作品が古拙である爲と言ふよりは、兒童の生活が無意識的に作品に反映したものと言ふべきである。

（つづく）